

日本政府出展事業（日本館）基本構想

日本政府出展事業（日本館）基本構想

目次

1.	2025年大阪・関西万博開催の意義	1.2
2.	日本政府出展事業の目的と使命	3
3.	出展に際しての視点	4
4.	日本館の主題	5.6
5.	日本館を通じた来場者体験	7.8
6.	建築・空間設計の在り方	9
7.	展示の在り方	10
8.	コミュニケーション（広報・行催事）の在り方	11
9.	運営の在り方	12
10.	今後の進め方	13
11.	参考資料（日本館基本構想ワークショップについて）	14

1. 2025年大阪・関西万博開催の意義

国際博覧会（万博）は、人類の科学的・文化的な成果や新たな未来像を提示する世界の祭典である。

そして21世紀の国際博覧会は、2005年愛知万博を機に、地球的課題と人類社会の持続的な発展を主なテーマとして、人類における変化の意義への理解を助け、世界が直面する難題解決への針路を示してきた。

日本は、1867年パリ万国博覧会から多くの国際博覧会に参加し、また、1970年に初めて日本で開催された日本万国博覧会（大阪万博）以降、5回にわたり国際博覧会をホストしてきた。これまで日本で開催された国際博覧会は、開催を契機として、インフラ整備や都市開発などを通じて日本自身が大きな飛躍を遂げるとともに、科学的・文化的な成果や新たな未来像を提示するなど、国際社会に大きく貢献してきた。

「人類の進歩と調和」をテーマに掲げた1970年日本万国博覧会から半世紀が経過し、日本と世界を取り巻く環境も大きく変化した。経済発展が進む一方で、少子高齢化への対応、温室効果ガス等の気候変動対策、生物多様性保護など、一つの国だけでは解決できないたくさんの社会的課題の解決と経済発展の両立が求められている。

そのような中、日本は2050年までに温室効果ガスの排出を全体としてゼロにする、すなわち2050年カーボンニュートラル、脱炭素社会の実現や、海洋プラスチックごみ対策などの持続可能性への取組を国際社会と共に推進することとしている。また、AIやIoT、ロボット、ビッグデータをはじめとするデジタル技術を活用して社会的課題の解決と経済発展を両立させる「Society5.0」の実現に向けて取組を進めている。

2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）は、このような新たな技術やシステムを実証する場となり、国内外の多様なプレイヤーによるイノベーションを促進しそれらを社会実装していく「People's Living Lab（未来社会の実験場）」になる。

また、大阪・関西万博が開催される2025年は、持続可能な開発目標（SDGs）達成の目標年である2030年を5年後に控え、SDGs達成状況を検証し、その先（+beyond）に向けた取組を加速させる上で重要な年となる。大阪・関西万博をSDGs達成さらにはSDGs+beyondに貢献する国際博覧会とする。

そして、世界が危機に直面した新型コロナウイルス感染症を経て検討される2025年大阪・関西万博の

テーマは、「いのち輝く未来社会のデザイン」である。

「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマは、一つ一つの「いのち」が望む生き方を考え、それぞれの可能性を最大限に発揮するとともに、こうした生き方を支える持続可能な国際社会の共創を推し進めるものである。

言い換えれば大阪・関西万博は、格差や対立の拡大といった新たな社会課題や、AI やバイオテクノロジー等の科学技術の発展、その結果としての長寿命化といった変化に直面する中で、参加者一人一人に対し、人類と地球にとって「幸福な在り方とは何か」を正面から問う、初めての国際博覧会になる。

世界的な危機を乗り越え、一人一人のいのちを守り、いのちの在り方、生き方を見つめ直すこと。あらゆるいのちが健やかに、幸せに生きる社会をどう実現するか。またそうした多様な生き方を支え、持続可能な社会・経済システムをどう構築するか。

大阪・関西万博という「場」に世界の叡智とベストプラクティスが集い、多様な価値観を尊重し合いながら、未来に向けて一人一人が行動し、未来がより良い方向へと変わっていく。大阪・関西万博は、一つ一つの輝くいのちの交流と創造によってデザインされる未来の展望を世界に示す国際博覧会となることを目指す。

2. 日本政府出展事業の目的と使命

1970年に開催された日本万国博覧会の日本館は、日本の実態を示すとともに、代表的展示館として日本万国博覧会の「顔」となり、会場全体の「要」となる役割を志向した。そして世界の人々の日本に対する理解を深めるとともに、国民に対し強い自信と明るい希望を与える中で、東西の調和の上に立つ日本の立場から「人類の進歩と調和」に貢献していく進路を示し、国民に自覚と自信を与えることを基本思想とした。

また、2005年に開催された愛知万博においては、21世紀最初のホスト国館として、万国博覧会の歴史を踏まえ、前世紀のホスト国紹介中心の日本政府出展事業を超え、世界と共にテーマを共有しながら先導する提言型の日本館を志向した。そして「自然の叡智」を具現化する館として、日本独自の伝統と最先端の技術で、日本を越え、人類と自然が共に栄える真に豊かな時代を提案することを基本思想とした。

その他にも、日本で開催された国際博覧会における日本政府出展事業は、それぞれの時代に向き合い、世界と共に課題を解決することを使命としてきた。

そして今、本基本構想を検討している2020年は、新型コロナウイルス感染症により全人類がほぼ等しく危機にさらされ、これまで当たり前だと考えていた生活様式の変更を余儀なくされた。まさに、誰もが「いのち」や「生きる」ということに向き合わざるを得ない一年であった。一方で、デジタルネットワークがこれまで以上に生活空間に入り込み、人との付き合い方、働き方、生き方が変容し、価値観の多様化も一層顕著に現れた。

「いのち」という原点に立ち返り、一人一人のいのち、また地球という母体の中で生かされる様々ないのちに向き合う。そしてこの土壌を大切な次世代のいのちへと受け継ぐために、持続循環型の仕組みを前提としながら、個々人の選択が自由に拡がり、互いに尊重され、自己実現できる社会を目指す。

不完全ながらも共生の中で輝く「いのち」たちが作り出す未来社会を、2025年に日本館は世界と共にデザインする。

3. 出展に際しての視点

- 開催国として、「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマと3つのサブテーマ（「いのちを救う」「いのちに力を与える」「いのちをつなぐ」）に関する日本独自の取組を世界に発信する。
- 国連と連携し、持続可能な開発目標（SDGs）に関連する各国の取組を横につなぎ、SDGsの達成に貢献するとともに、SDGsの先（+beyond）のビジョンに関する議論を促す。
- 「未来社会の実験場」として、特にSociety5.0の実現に資するハード・ソフト両面の技術やシステムの開発、試験的導入を推進するとともに、大阪・関西万博後の社会実装に結びつける。
- 世界の課題をクリエイティブに解決する日本のテクノロジーや民間の取組を可視化し加速の契機とする。
- 新たな才能を育成する場として、特に若い世代のクリエイター、科学者、エンジニアなどの参加とコラボレーションを積極的に推進し、新たな才能の飛躍の機会を創出する。
- 子どもたちのための社会教育の場として、子どもたちの参加体験を重視するとともに、計画段階からの共創にも挑戦し、次世代（万博チルドレン）の育成に努める。
- 生物と非生物、生と死、人と人以外の生物とのコミュニケーションなど、いのちにまつわる様々な境界線やそれらの進化に関する問いを投げかけ、一人一人が新たな「いのち」の在り方を定義するような機会を提供する。
- 日本館全体を通じてコンセプトを体感できるように、先端技術を活用し、既存の枠組みにとらわれない仕組みを建築や展示などのあらゆる分野に取り入れ、個人の行動変容を促す。
- SDGsに代表される地球規模の社会課題について、その背景や状況を正しく理解するだけにとどまらず、一人一人の経験や生活、地域に引き付け自分事化できる体験を通じ、来場者が具体的なアクションを起こすきっかけとする。
- 人々の多様な参加を実現し、会期前から日本館に主体的に関わる人口の拡大に取り組むとともに、一人一人の選択が尊重され、個々人が創造性を発揮し、未来への展望を体感できる契機とする。

4. 日本館の主題

『テーマ』

いのちと、いのちの、あいだに - Between Lives -

『テーマコンセプト』

来場者は、他者と自分、人と人以外、生物と非生物など、様々ないのちといのちの「あいだ」(境界・差異・関係性)を見つめることで、それぞれのいのちの尊さや、互いに支えあっている存在であることを自覚する。自分たちが大きな地球の中で生きていることに気付き、他のいのちと共創しながら大きな循環を生み出す大切さを学ぶ。こうした一連の体験を経て、SDGsに代表される社会課題を自分事として咀嚼し、未来社会のつくり手としての行動変容を促す。

『テーマステートメント(テーマに込めた意義・背景)』

2020年、新型コロナウイルス感染症の発生と拡大により、私たちはかつてない分断と価値観の揺らぎを体験し、自分たちのいのちと繋がり大切さにもう一度向き合うことになった。その一方では、コロナ禍において世界がロックダウンしている間に、自然環境は急速な改善を見せた。新型コロナウイルス感染症の痛みの中で、私たちは生態系と共生するきっかけとヒントも得たのかもしれない。この両面性ある特別な経験は奇しくも、大阪・関西万博のテーマである「いのち輝く未来社会」とはなにかを深く考える契機となった。

なかでも強く実感したのは、私たちは決して一人では生きていけないということではないか。私たちはどのような状況においても、他者とのコミュニケーションや様々な生物との繋がりを必要としている。地球は長い時間をかけて、生態系を変化させ、いのちの源である水は循環し、多様な生命が繋がる生態系を

育んできたが、その環境は劇的に変化している。だからこそ、人類以外の生命や環境との相互作用のなかで、それぞれの環世界を尊重しながら、いのちの在り方を見つめ直すことは重要な意味を持つだろう。

一方でデジタル空間や宇宙など、新たなフロンティアの存在がますます身近になり、私たちは、空間や時間を超えた繋がり、人と人の繋がりを紡ぎ出す方法を獲得しつつある。こうした時代認識を踏まえ、日本が古来有する万物への畏敬や死生観・自然観を基に、完全無欠ではない一つ一つのいのちが、それぞれの輝きを放ちながら力を合わせ、互いに共鳴しあい、未来社会を構築することを実感する日本館を提案したい。それぞれのいのちが響き合い、共に地球の未来を創ることを体現すべく、地球を中心としたデザインの観点も踏まえ、世界と共にいのちの在り方を考える場としていく。

故に、日本館はパビリオンという枠をも超え、地球環境とデジタルな世界とを相互に繋ぎあう有機的なプラットフォームとなり、準備・計画段階から、多様なプレイヤーの参加を受け入れる。あらゆる応答は祝福され、参加者の関わり方により、パビリオンのコンテンツは生物のように進化する。日本館に参加する人たちは皆、自らの選択によって様々に変化する物語を体験し、その選択が未来に繋がることを実感する。

日本館は未来が生まれる場であり、他者・コミュニティ・地球環境と「関わりしろ」を持ちながら、全ての参加者を主体として迎え入れる。そして、日本館を体験した少年少女たちは万博チルドレンとして、誰もが一回り成長し、未来社会を実現するクリエイターとなるだろう。

5. 日本館を通じた来場者体験

①パビリオン来場前（会期前～会期中）

来場者は大阪・関西万博が開催される2025年の前から、多くの人が参加したくなる魅力的なストーリーの発信など、日本館のプロセスに参画できるようになる。政府から積極的な日本館の発信を行うとともに、日本館に関心を持ったプレイヤーも発信主体として関われる仕組みを通じて、未来の来場者自身も日本館の一人の作り手として関与できる。

日本館の建築プロセスにも共創要素を取り入れ、デジタル技術やデジタル空間を活用し、個人や地域のプレイヤーが、会期前から日本館に触れるとともに、一般の来館者もデジタル空間を活用し、事前に日本館のコンテンツを体感した上で、2025年の日本館のパビリオンに来場する。

②パビリオン来場中（会期中）

パビリオンは来場者の選択や情動に呼応する設計とし、来場者自身が主体的に関わることができる。大阪・関西万博のテーマである「いのち」について、その多様な在り方に思いを巡らせられるよう、例えば、他者視点での経験や自分自身との対話を促すストーリーの実空間／デジタル空間横断展開など、新しい体験を来場者に提供する。持続可能性を回復しながら自分らしく生きるにはどういったアクション・選択ができるのか、来場者自身が考えながら回遊をしていく。

デジタル空間にも日本館のコンテンツを配置し、リアルな空間とデジタル空間とが各々独立するのではなく、互いに連動するように両空間を設計する。例えば、フィジカルな日本館に訪れている来場者と、世界中の様々な場所からデジタル空間に来場している参加者とが関わり合いをもち、空間を超えた関係性の連鎖を紡ぎ出す。

「来場」という概念を拡張し、例えば、デジタル空間に構築されたデジタルな日本館への来場、アバターロボット等のテクノロジーを活用した空間を超えた来場など、多様な来場手段を提供することで、様々な理由で物理的に訪れることができなかった人々の来場を可能とする。

③パビリオン来場後（会期中～会期後）

展示とともに、「いのち」や「SDGs+beyond」に関するフォーラム等にも参加することで、展示で得た学び・気づきを自分自身の言葉で言語化する機会を設ける。

パビリオンを通じてSDGsに代表される社会課題や、未来における人類社会の在り方について自分事化を促し、来場後、自身の日常生活の中でアクションを起こす人を増やす。

会期後も日本館コンテンツの一部はレガシーとして残せるよう検討し、日本館を経験した「万博チルドレン」を含む全ての人が自分自身の経験を世の中に発信する際の素材として活用できるようにする。

6. 建築・空間設計の在り方

①展示と建築の融合による一貫した来場者体験の創出

展示を行うための「ハコモノ」としての建築ではなく、それ自体が来場者体験の一部となるよう、展示コンセプトと融合した来場者体験の創出を目指す。特に、建築とデジタル空間との相互的な関係性、来場者との空間とが呼応するインタラクションについて、建築設計の段階から考慮する。

②建設サイクル全体を通じた循環システムの構築

環境に配慮した建設資材を活用するとともに、資材の調達から解体までの一連の建設サイクルを通じた、新しい資材循環の仕組みを構築する。

③会期前からの参加者の巻き込み

出展までの検討、建築過程を見える化し、会期前からのできるだけ多くの参加者の巻き込みを図る。

④屋内外を通じた敷地空間の柔軟な活用

屋内と屋外をそれぞれ区分せず、敷地全体を活用した空間設計を行う。

⑤サステナブルな資源利用

SDGs推進のため、環境負荷低減や里山保全等にも配慮し、日本らしさも意識したサステナブルな資源利用を行う。

7. 展示の在り方

①来場者の主体性を重視した多層展示

来場者が自らの選択や情動の変化によって異なる展示を体験できる多層的な展示構成とする。また、来場者の選択やアクションの蓄積が展示コンテンツそのものを変容させていくような設計・フィードバックも検討していく。

②ダイバーシティを実感する展示体験

「身体的な特性や社会的背景の違う他者への共感やダイバーシティ」について考えてもらうために、最先端のテクノロジーを活用し、異なる状況、異なる特性の他者や生物、非生物の世界を感じられるような体験を取り入れる。

③自分事化を促す双方向展示体験

パビリオンの中で提示するコンテンツを自分事化するために、単なる展示にとどまらず、来場者自身が積極的に関わり、作り手になりたくなる仕掛けづくりを行う。

④循環動線の連関を意識した空間構成

「循環する世界」について考えてもらうために、展示空間は、まるで生態系のように様々な循環動線を連関させる構成とする。

⑤リアルとデジタルの相互連関

物理的な空間のみならず、デジタル空間も活用し、リアルとデジタルがそれぞれ独立しているのではなく、例えば相互に関連し、両空間の参加者が互いの存在を感じとったり、デジタル空間に訪れている参加者のアクションが来場時の体験にも反映されたりするなど、両空間の参加者の関係性や共創を生み出せるような仕掛けづくりを行う。

⑥自分の「いのち」と向き合う体験

自らの「いのち」について向き合ってもらうために、例えば来場者自身の身体能力や健康状態、興味関心やメンタルの状態を可視化するなど、自己に向き合う体験を提供する。

⑦大阪・関西万博後の社会実装につながる展示

展示コンテンツの形成過程において、大阪・関西万博後の社会実装が可能な技術等の開発に積極的に取り組む。

8. コミュニケーション(広報・行催事)の在り方

①会期前からのコミュニティ拡大

2025年の本番に向けて、2021年度から日本国内、ひいては世界に向けて大阪・関西万博や日本館に関する情報発信を行う。

②未来を担う子どもたちとの対話

未来の当事者である子どもたちが日本館の創作プロセスに関与できるようにし、日本館を通じて様々な創造的活動や社会教育の機会や対話の場を提供する。

③多様なプレイヤーを発信主体として巻き込む

第一線で活躍する日本館のコンテンツ制作者による発信だけでなく、彼らや日本館のストーリーに共感した多くのプレイヤーに日本館の取組を発信してもらうことで日本館を自分事化し、日本館の関係人口を増やしていく。

④アカデミアと連携し、サイエンスコミュニケーションの機会に

いのち・生命科学、情報技術等に関する学会や研究プロジェクト等と連携し、学術的観点から日本館のテーマに関する深堀を行い、2025年のパビリオンにおいても多領域の科学者による国際学会やフォーラムを開催する。

⑤SDGs+beyondに関するフォーラムの開催

国連等とも連携し、SDGs+beyondについて来場者が思いを巡らせることができるようなフォーラムを開催し、2030年より先の未来像について議論を行っていく。

9. 運営の在り方

① バリア／ストレスフリーなパビリオン運営

運営も来場者が接するパビリオンの一部であることを意識し、最先端のデジタルテクノロジーを導入し、ハード・ソフト両面からのバリアフリー化を図るとともに、例えば待ち時間ゼロや運営に関わる人のダイバーシティ確保にも配慮するなど、運営者・来場者双方の満足度が高いストレスフリーなパビリオン運営を行う。

② 主客一体の体現

日本古来の文化やおもてなしを体現する茶道にも謳われる、主客一体を目指し、スタッフと来場者の垣根を超えて共同で一つのパビリオンを作り上げる体験を生み出す。

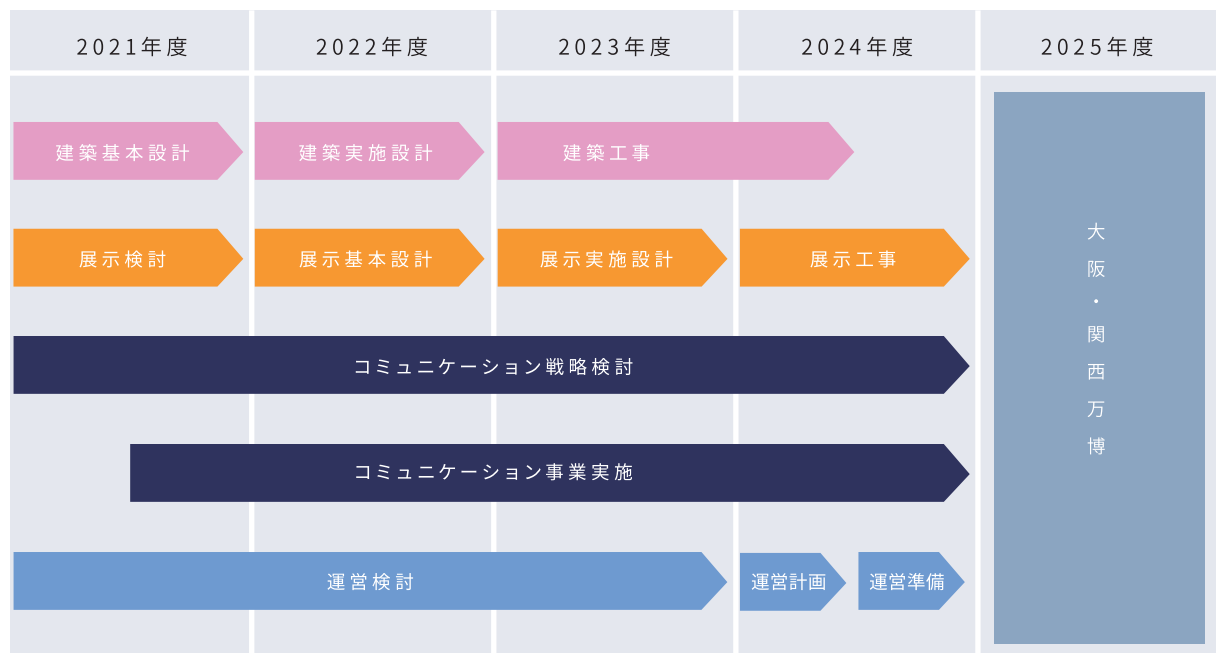
③ 感染症対策も踏まえた安全安心な体制構築

従来のセキュリティ対策などに加え、新型コロナウイルス感染症の影響を鑑み、来場者が安全・安心にパビリオンを体験できるように感染症対策にも万全を期す。

10. 今後の進め方

① スケジュール

本基本構想策定後、大阪・関西万博開幕までの主なスケジュールは、以下のとおりである。(令和3年4月時点)



② 推進体制

今後の日本館の検討に当たっては、経済産業省のもと、日本館を構成する建築や展示等の分野特性に応じた検討体制を構築するとともに、それらを横断的に監督し、各分野に対し指示・提案等を行うような建築・展示等の専門的な知見を有する有識者(総合プロデューサー(仮称))を配置する。また、2025年に向けた機運醸成も兼ねて、民間企業・団体やソーシャルセクター、クリエイター等の日本館事業への参画も検討する。

11. 参考資料(日本館基本構想ワークショップについて)

① 参画有識者一覧(五十音順)

- ・市原 えつこ氏(メディアアーティスト)
- ・指出 一正氏(株式会社sotokoto online代表取締役/ソトコト編集長)
- ・佐藤 オオキ氏(デザインオフィスnendo代表/デザイナー)
- ・塩瀬 隆之氏(京都大学総合博物館准教授)
- ・太刀川 英輔氏(NOSIGNER 代表/デザインストラテジスト/慶應義塾大学大学院特別招聘准教授)
- ・田中 みゆき氏(キュレーター/プロデューサー/東京都渋谷公園通りギャラリー学芸員)
- ・平賀 達也氏(ランドスケープアーキテクト/株式会社ランドスケープ・プラス代表取締役)
- ・平田 晃久氏(建築家/京都大学教授/平田晃久建築設計事務所)
- ・南澤 孝太氏(慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科教授)

② 実施概要

◇第1回ワークショップ(令和2年7月30日開催)

主な議題: 日本館の概要説明、日本館のターゲット及び各構成要素に関する意見交換

◇第2回ワークショップ(令和2年9月15日開催)

主な議題: 日本館の来場者体験に関する意見交換

◇第3回ワークショップ(令和2年10月20日開催)

主な議題: コロナ禍による変化及び2025年の未来像に関する意見交換

◇第4回ワークショップ(令和2年11月27日開催)

主な議題: 日本館のステートメントに関する意見交換

◇第5回ワークショップ(令和3年1月29日開催)

主な議題: 日本館基本構想案に関する意見交換

経済産業省 商務情報政策局
商務・サービスグループ 博覧会推進室

